最初の疎開保育園と最後の熊谷空襲

吉田　博行

はじめに

2020（令和２）年８月の夏、わが国は、戦後75週年を迎えた。そして、世界中は大変な事態となっている。2019（令和元）年12月31日に中国の武漢市で、原因不明の肺炎患者の存在が公表されてから、新型コロナウイルスの感染拡大は止まらず、いまもなお収束が見えないでいる。わか国では、第２波、第３波と再流行が繰り返され、2021（令和３）年１月７日に緊急事態再宣言が発出され、感染防止として、ワクチン接種が期待されている。今は、こうした時代を迎えている。

さて、本稿では、太平洋戦争末期、日本で最初の疎開保育園と同時期、終戦を迎えた熊谷空襲についての歴史を整理しておきたいと考える。

きっかけは、映画「あの日のオルガン」による。東京と埼玉を舞台としたこの映画の足跡をたどることにあった。その時代、奮闘する保母の姿があり、映画の終盤には、熊谷空襲のシーンがあった。熊谷市は日本で最後の空襲による被災地と知られ、歴史的研究の意義が期待されている。今回は、保育の視点から、関連する歴史の一面を整理し、その時代と今をみつめてみたいとおもう。

１　映画「あの日のオルガン」について

園児たちは、寄り添う先先とともに、汽車で桶川駅に降り立ち、手をつないで疎開先へ向かった。53人の子どもの笑顔を守る。それが保母（現：保育士）たちの使命だった。

太平洋戦争末期、埼玉県平野村（現：蓮田市）に開かれた疎開保育園の実話を題材とした映画「あの日のオルガン」（監督：平松恵美子）が、全国公開（2019（平成31）年２月22日から）された。

翌23日、平松恵美子監督と主演の戸田恵梨香さん（主任保母・板倉楓役）及び、大原櫻子さん（新米保母の野々宮光枝役）らは、さいたま市緑区の「イオンシネマ浦和美園」を訪れ、公開記念舞台あいさつに臨んだ。この映画は、園児たちを空爆から守ろうと、東京の保育所の若い保母（現在の保育士）たちが集団疎開を敢行し、53人の命を救った物語である[1)]。

1944（昭和19）年の東京で、20代を中心とした若手保母たちが、日本で初めて園児を連れて集団疎開を敢行した、いわゆる疎開保育園の事実はあまり知られていない。

戸越保育所の主任保母・板倉楓は園児たちを空爆から守るため、親元から遠く離れた疎開先を模索していた。最初は反発していた親たちも、子どもだけでも生き延びてほしいという一心で、保母たちに子どもを託すことを決意する。しかし、ようやく見つかった受け入れ先は、ボロボロの荒れ寺だった。疎開保育園の生活は、問題山積であった。それでも保母たちは、子どもたちと向き合い、みんなで勇気づけていく。そして、1945（昭和20）年３月10日、米軍の爆撃機が東京を襲来する。やがて、疎開先にも戦争の影が迫っていた。大切な命を未

来へつなぐことを願い、毎日を必死で戦った保母たちの姿は、時を越えて今を生きるわたしたちに感動を与えてくれる[2)]。

五十嵐　佳子著『小説　あの日のオルガン』朝日文庫　表紙から[3)]

本映画の原作は、久保つぎこ著『あの日のオルガン　疎開保育園物語』（朝日新聞社）[4)]である。その他、実話を基にした童話に高木敏子・狩野ふきこ『けんちゃんとトシせんせい』（金の星社）[5)]、五十嵐佳子著『小説　あの日のオルガン』（朝日新聞出版）[6)]等がある。

『あの日のオルガン　疎開保育園物語』は、かつて、1982（昭和57）年『きみたちは忘れない　疎開保育園物語』として、草土文化から発刊された。その後、36年たって映画化され、改題、加筆、修整された。本書のプロローグは、当時の保母と子どもとの場面に続き、筆者が1980（昭和55）年11月10日、映画の舞台でもあった蓮田市の妙楽寺へ向かう記述から始まる。本文献は、「保育園は疎開できます」、荒れ寺に園児と保母がやってきた、東京大空襲と熊谷空襲のはざまで、エピローグと編集される。

絵本『けんちゃんとトシせんせい』では、疎開保育園を舞台として、福知トシ（トシせんせい）と園児の田辺健之（けんちゃん）のかかわりを中心としたおはなしである。

『小説　あの日のオルガン』は、防空壕の中、懐中電灯の弱々しい明かりをたよりに影絵芝居のシーンから始まる。本文献では、小さな命、先先になら子どもを、杉木立ちの先に、イチョウの木の下で、寒さとさびしさと、この道はいつか来た道、あんぽんたん、早く　戦争やめろ、野の草を摘んで、等映画に基づいて編集される。

2　戦争末期の保育とはじめての疎開保育園の歴史

1943（昭和18）年は、国や自治体が、生産増強という至上目的にそって、農村では季節託児所を、都市では、戦時託児所を積極的に推進しはじめた年である。しかし、それらはいずれも、きわめて安上がりで間に合わせのそして、それ自体がしばしば女子の勤労動員によって支えられねばならない施設にほかならなかった。

1944（昭和19）年には、大都市をはじめ全国的に米空軍による大空襲の危機が迫ってきた。４月１日、東京都は、都内の全幼稚園に対して、閉鎖令を出した。６月の末、政府は、「国民学校初等科児童ノ疎開ヲ促進スル」方針決定し、８月から東京をはじめ各都市で学童の集

団疎開が開始された。

1944（昭和19）年６月以降、東京をはじめとする全国主要都市は、日夜空襲警報に脅かされるようになった。防空壕への出入りが日課のようになり、保育は、事実上まひ状態におちいった。こうした事態においても当局は、多くの困難のゆえに、幼児の集団疎開など、問題外とする態度をとり続けていた[7)]。

これに対して、最初の集団疎開に踏み切ったのは、当時母子愛育会に移管されていた戸越保育園と愛育隣保館（旧：東京セツルメント）であった。同年11月25日のことである。それは、虚弱児施設の24時間保育の経験をもつ一保母の「幼児の疎開も可能だ」という提言に基づいた決断であったという[8)]。戸越保育園の保母の畑谷光代が、小学校の学童疎開の新聞記事をみて、所長の森脇要に進言したことにはじまるといわれる。

疎開先は、高崎線桶川駅から６キロ離れた無住の荒寺が選ばれた。当初は、満３歳未満の幼児53人、職員11人（保母８人、保健婦、栄養士、炊事係各１人）であり、健康管理は、週１回医師が出張してあたることとなった[9)]。

東京都が疎開保育園の開設に踏み切ったのは、すでに敗戦を間近にした７月のことであった。埼玉、群馬などの各県に計７カ所の疎開班が設置され、総数２百数十名の幼児が戦火の東京を脱出していった[10)]。

よって、日本で最初の疎開保育園は、東京の戸越保育園と愛育隣保館によるもので、疎開先は南埼玉郡平野村（現：蓮田市大字高虫）であることが確認される。

3　疎開保育園の生活日課について

当時の記録によれば、疎開保育園の職員は、12月には、保母８、保健婦１、栄養士１、炊事係１の計11人で、これだけの人数で53人の幼児をかかえていた。

とくに、隣保館から連れてきた子どもの中には、小さい３歳になるかならないかという幼児が２人いて、４歳に満たない子どもの数は全部で10人であった。悪条件の中で、この世帯をかかえて、とにかくも、24時間保育をやっていかなければならい。ガスもなければ、水道もない。12月だというのにガラス戸もない状況であった[11)]。

疎開保育園にとっての最重要課題は、健康の保持と食料確保の問題であった。園児の健康の保持については、伝染病が出た場合、被害の広がりが懸念された。中でもジフテリアは最も心配されたことだった。このほか、夏になると、蚊と家ダニの発生にあい、大人も子どもも皮膚病に悩まされたが、医師と看護婦による対応で健康管理が維持された。

疎開先での食糧確保の問題については、愛育会が主催で、地元地域の寺、村、農業会、警察、消防関係者とつながり、主食、副食、燃料などの供給に協力を仰ぐこととなった。

しかし、当初は、疎開保育園は、「消費班」として、一般的には白眼視される風潮にあった。地域との経験を積み重ねつつ、徐々に緩和されていったという。このように、地元との協力や連携は、疎開保育園にとっては、不可欠な要素であった[12)]。

さて、疎開保育園の生活日課について、その概要を下記に示す。

疎開保育日案

7時半　起床（夏は6時半）その後用便・洗顔
9時　朝礼　東京の方面に向かい「お父さん・お母さんおはようございます」
その後、並んで庫裡に入り食事
10時　戸外保育
12時　昼食
～自由遊び、散歩、親に手紙を書く（4月以降は、この時間に昼寝を取り入れた）
3時　おやつ
～自由遊び、集団あそび
4時　入浴（本堂では就寝の準備）
5時　夕食
6時　就寝　病児の点検・治療・湯たんぽの準備、担当の保母による童話の読み聞かせ
8時　睡眠（夏は7時半）

通常の遊びなどのいわゆる保育時間は、1日の約5分の1程度であり、その他はすべて衣食住の世話となっていた。保母の仕事は、炊事、洗濯、保育、風呂、夜番など、日課に従ってそれぞれ交代で担当が決められていた[13]。

当初の24時間保育は、全体的保育においては、どの保母がどの子どもを世話すると決めず、その日の当番に当たった保母が、その仕事をするといった流れ作業方式であった。様々な問題もあり、その後、母親制度に切り変えられた。これは、流れ作業とは逆に、1人の保母に対して、何人かの子どもを託し、その子どもに対して、責任をというものであった。母親制度は、子どもの心身の発達をとげるという本質的な面で高い効果がみられたといえる[14]が、一方で、いくつかの課題もあったという。当時、保母たちの奮闘する姿が想像される。

4　埼玉県南埼玉郡平野村字高虫の妙楽寺について

プラットホームに降り立って、簡素な駅の屋根ごしに空をながめると、11月の風が、冷たく、小さく吹きぬけてゆく。髪の毛から襟首へ。その、さざ波のような細かい風は、桶川駅の繁華街をヒョイショイと飛びながら、広い広い畑からやってくる。関東平野の東、埼玉県南埼玉郡平野村高虫。戦争終結の前年、1944（昭和11）年11月25日のことである。

今、私が立っているこの国鉄高崎線桶川駅から、保母たちに引率された幼児の集団が、徒歩で6キロの道のりを行った。高虫の妙楽寺まで[15]。と、久保つぎこ氏は記す。

2020（令和2）年7月7日、妙楽寺から桶川駅への道のりを調査した。妙楽寺へは、数回現地視察をしていたが、この日は、桶川駅へ向かい再び妙楽寺へ行ってみた。JR高崎線桶川駅東口から国道17号方面へ向かう。国道を過ぎると、ほぼまっすぐな道のりである。やが

て、民家は少なくなり、田園風景となる。綾瀬川を渡ると、道路に突き当たる。そこを右折して、少し行くと、道路は右側にゆるくカーブしている。その左側に妙楽寺の石門がみえる。今の道で、歩くと１時間半以上はかかる。その当時、保母らが子どもを連れて、ここまで歩いたことを想像すると大変な疎開であったことが想像される。

蓮田市は、1954（昭和29）年５月３日、町村合併促進法に基づいて、蓮田町及び黒浜村と平野村の２村を合併して新たに蓮田町を設置した。その後、岩槻市大字川島、大字馬込の一部を編入し、1972（昭和47）年10月１日に市政を施いた。それ以前、1889（明治22）年、高虫、上平野、駒崎、井沼、根金の５村を合併して平野村が設置された。

高虫は、古くは岩槻領に属していた。高虫とは、気になる呼び方である。髙苧の当て字か。苧とは、カラムシのこと。カラムシはイラクサ科の多年草で、野原に自生し、その茎の皮から繊維で糸を作り、ちぢみ、上布などの織物とする。苧の丈の高いものが繁茂していたため、その名を得たとみられる。特殊の有用植物の存在が地名となることはよくあることである[16]と、記される。そのカラムシを食草とし、集まる昆虫がいて、繁茂する夏から秋にかけてよく見られるという。

2020（令和２）年５月27日、現地を調査した。カーブした道路沿いに石門と記念碑をみることができた。記念碑には、「日本初　疎開保育園開設の地」とあり、その横に説明が記されていた。1945（昭和20）年６月頃の実際の写真と映画のパンフレットもあった。

日本初　疎開保育園開設の地

1944年（昭和19年）11月25日、太平洋戦争末期に空爆を避けるため、東京の戸越保育所（現品川区）、愛育隣保館（現墨田区）の３歳から６歳の園児53人が若き保母たちに連れられて、南埼玉郡平野村（現蓮田市大字高虫）に集団疎開し、日本で初めての疎開保育園がここ妙楽寺で始まりました。

11人の保母たちは、終戦を迎えるまでの１年近く、幾多の困難を乗り越え、保育への理念や希望を失うことなく、明るくひたむきに園児たちの命を守り抜きました。

疎開保育園を運営した恩賜大日本愛育会（現社会福祉法人恩賜財団母子愛育会）は、財政支援と園児たちの健康管理に奮闘するとともに、村人たちとの交流に奔走しました。

村人たちも、これに応えて、食糧不足の中、村を挙げて園児たちの食糧確保に取り組み、この疎開保育園を支えました。

戦後、その保母たちは、各方面で活躍し、保育の基礎を築き、その思いは後進に脈々と引き継がれ今日に至っています。

この実話が2018年（平成30年）、映画「あの日のオルガン」として映画化され、多くの人々に感動を与え、全国各地で上映会が行われました。

私たちはこの実話を永く語り継ぐとともに、命の大切さや平和への尊さを伝えていきます。

2020年（令和２年）

映画「あの日のオルガン」蓮田市上映実行委員会

真言宗智山派薬王山延明院妙楽寺檀徒一同[17]と記される。

日本初　疎開保育園開設の地　碑　2020年５月27日　筆者撮影

道路に面した石門を入り、木々に覆われた道中を行くと、駐車場と立派な山門と本堂の真言宗智山派薬王山延明院妙楽寺があった。寺伝によれば、1556年に開創され、300年維持してきたが、2007（平成19）年10月16日に全焼した。その後、新しく山門、本堂が完成したとある。今は、きれいなお寺となっていた。イチョウの木は、蓮田市の保存樹木となっていた。当時の面影は想像できるが、その時代は荒れ寺で、ここに疎開保育園が存在していたのである。

妙楽寺　本堂　2020年７月７日　筆者撮影

5　終戦を迎える熊谷空襲のシーン

映画「あの日のオルガン」の終盤に、熊谷空襲のシーンがあった。
５月の終わり近く、大規模化する一方だったＢ29の都市に対する焼夷弾の無差別攻撃のために、３人の保母の家族が焼かれ、１人の保母は母を失った。
個々がひどい目にあっても、戦争は終わらない。
５月末までに大規模な爆撃により、東京は全都市の半分が焼失した。
そして、６月以降、大都市から中小都市へとＢ29の爆撃目標は移り、全国の小都市にいたるまで、焼夷弾で焼き尽くされていく。

夏。ついにここ、埼玉にもＢ29がやってきた。
村の人たちも防空壕を掘り、警報が鳴るたびに防空壕に飛び込み、警報が解除されるのを待つようになった。
保母たちも警笛が鳴れば、子どもたちを防空壕に避難させる。暮らしの道具も総出で防空壕に放り込む。（略）

寝静まりかえった本堂に突如、空襲警報が鳴り響いたのは、８月14日の夜だった。
爆撃機は自分たちの頭上を通って、どこを爆撃するただろう。（略）

真っ暗な闇の中に赤く染まった空が見えた。あれは炎だ。町が、村が燃えている。
ヒュー、サー、ヒュー、サー……。
ひっきりなしに続く花火のような音は焼夷弾が落ちる音だろうか。（略）

逃げ惑う保母たち、「じゃあ、私たちどこに逃げるの」
「そんなところない、逃げるところなんてない、この国のどこにもないの！」（略）

「気が付いたら戦争とずっと一緒だった。もう15年も戦争と一緒。どこへ逃げたって、も同じ。……戦争は追いかけてくるんだから。どこまでも、どこまでも、どこまでも」（略）

その夜、82機の爆撃機機が熊谷市に593トンの爆弾を投下し、266人の命を奪った。
８月14日の深夜だった。
そして、翌日、日本は無条件降伏し、戦争は終わった[18]。
熊谷空襲の一場面である。

終戦の日から数日の間に、大半の子どもたちは、それぞれに迎えが来て、疎開保育園を引き上げていった。
保母たちは、53人の幼い命を救った。
全ての後始末を終え、妙楽寺を後にしたのは、11月も終わりに近い日だった[19]。

6　最後の熊谷空襲について

1945（昭和20）年８月14日は、熊谷市民にとっては永久に忘れることのできない日である。終戦前夜のこの日は、月遅れのお盆の施餓鬼の日でもあったが、深夜から翌15日の未明にかけて、米軍の空爆による火災で、一夜にして熊谷市は壊滅した。同市は日本で最後の空爆による被災地となった。これより先、戦局が苛烈になるにつれ、県内の軍事設備や通信施設および軍需工場が米軍機の攻撃目標とされ、空襲をうける回数も増えていた。

戦局は末期的状況となり、８月６日に広島へ、９日には長崎へ原爆が投下された。８月14日には、ポツダム宣言を受諾する御前会議が開かれ、いよいよ終戦を迎えようとしていたのである。

ところが皮肉なことに、熊谷市では、８月14日午後11時30分ころ、Ｂ29数十機の空爆を受けた。高度3,000～5,000メートル上空から、昼をあざむく照明弾とともに、夕立雨のように落下する無数の油脂焼夷弾や小型エレクトロン焼夷弾によって、市街地は一瞬にして火の海と化してしまった。市街地の74％にあたる35万8,000坪が焼失し、未曽有の大被害をうけた。なかでも、身を焦がしたものが星川へ飛び込んで、多くの焼死体があったという。

空襲を受けてから12時間後、余燼のくすぶる中で、茫然自失の熊谷市民は、昭和天皇の終戦放送を複雑な気持ちで聞いていた[20]。

どうして、熊谷は空襲されたのか。しかも、終戦まじかという時期に。

国立国会図書館所蔵の米軍側文書に、軍需生産していた市街地の町工場を攻撃対象として米軍が重視していたことを示す記述がみつかった。理由は明確ではなかったが、その意図を示す内容である。この記述は、「熊谷市街の産業地域」についての「標的情報報告」である。熊谷空襲の10日前の記述があり、Ｂ29爆撃機の部隊を統括する米第20航空軍の「Ａ-２標的セクション」の名がある。「標的標準報告」で、熊谷は、軍用飛行機生産の中軸企業だった中島飛行機の「必要不可欠な要素を含む」と指摘される。「下請け小工場は、飛行機生産の継続を可能にする恐れがある。よって、これら都市を標的にする価値は増すだろう」と記されている。

当時、熊谷の市街地は軍需品を生産していた町工場が点在しいた。同市月見町２丁目には、中島飛行機の協力工場であり、「零式艦上戦闘機（ゼロ戦）の後部胴体の組み立て」をしていた。他にも軍需生産に転用された大規模工場が市内に数カ所あった[21]。

熊谷空襲を伝承している「熊谷空襲を忘れない会」が中心となって、このたび『最後の空襲　熊谷』（社会評論社）を2020（令和２）年、出版した。高校生による空爆体験者へのインタビューの他、貴重な資料が掲載されている。県内全ての高校に本を寄贈した[22]という。

米軍の報告書によると、８月14日の爆撃作戦は、作戦番号325から330までの６作戦あり、そのうち作戦番号329が熊谷への攻撃作戦で、第314航空団によるものであった。

目標の重要性としては、熊谷は中島飛行機会社の飛行機部品製造の中心地の１つとして、航空機部品の最も重要性な分配センターの１つであるとしいてる。攻撃日の選定については、日本との和平交渉が敵（日本）によって遅延されているようなので、この作戦を８月14日から15日にかけて行うよう命じられたとある。つまり、航空部品の製造地にダメージを与えることで攻撃継続能力を奪い、和平交渉へと持っていくこための攻撃であった[23]。とみられる。

なぜ、８月14日の深夜だったのか？

どうして、熊谷空襲は、ポツダム宣言受諾に間に合わなかったのか。これについては、日本国内の意思決定の遅滞と通信状況のタイムラグに集約される[24]。という。

1945（昭和20）年７月26日、ポツダム宣言を日本が受けとった。

その後、日本国内で受託に関する議論がおこなわれた。

８月６日、９日に広島、長崎に原爆が投下された。

８月14日、正午頃、政府としてポツダム宣言の受託を決めた。

午後２時50分頃、同盟通信が「ポツダム宣言受託のメッセージが間もなく発せられる」というラジオ放送をニューヨークへ流していた。

午後11頃、日本国内で「ポツダム宣言の詔書完成、発効」

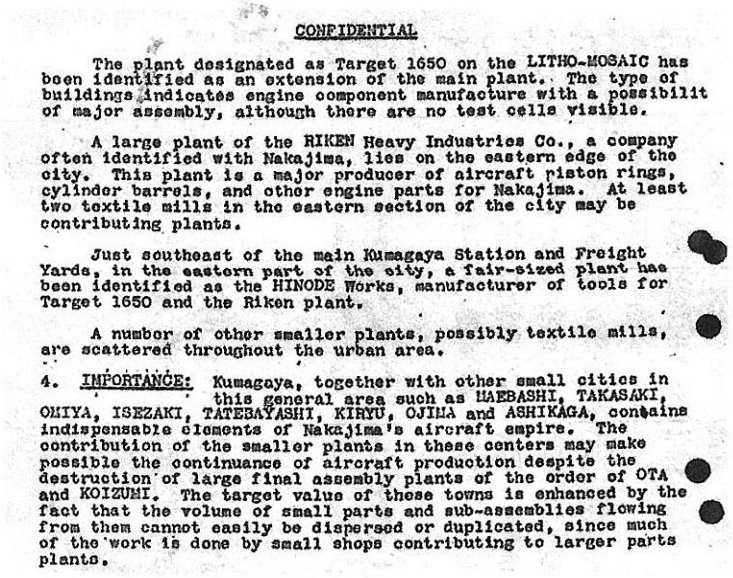
その後、中立国であるスイスに向けて受託に関する電報を打つことになる。

（現代はネット社会であるが、当時では、ここにタイムラグが生じる。）

午後４時10分、スイス公使がスイス政府に報告。その後、スイス政府からアメリカに報告されたのは、その３時間後となる。

８月15日、午後７時頃（ニューヨーク時間の８月14日午後７時頃）、実際に米国がポツダム宣言の受託の通告を受け取り、トルーマン大統領の記者発表へとつながる。

つまり、日本での詔書完成から８時間かかって、ようやく米国側へ通告された。熊谷空襲は、この８時間のタイムラグの中で起きたできごとであった。熊谷を空襲したＢ29のパイロットは、グアムに到着後まもなく、降伏のニュースを知ることとなった[25]。とある。



CONFIDENTIAL

The plant designated as Target 1650 on the LITHO-MOSAIC has been identified as an extension of the main plant. The type of buildings indicates engine component manufacture with a possibilit of major assembly, although there are no test cells visible.

A large plant of the RIKEN Heavy Industries Co., a company often identified with Nakajima, lies on the eastern edge of the city. This plant is a major producer of aircraft piston rings, cylinder barrels, and other engine parts for Nakajima. At least two textile mills in the eastern section of the city may be contributing plants.

Just southeast of the main Kumagaya Station and Freight Yards, in the eastern part of the city, a fair-sized plant has been identified as the HINODE Works, manufacturer of tools for Target 1650 and the Riken plant.

A number of other smaller plants, possibly textile mills, are scattered throughout the urban area.

4. IMPORTANCE: Kumagaya, together with other small cities in this general area such as HAEBASHI, TAKASAKI, OMIYA, ISEZAKI, TATEBAYASHI, KIRYU, OJIMA and ASHIKAGA, contains indispensable elements of Nakajima's aircraft empire. The contribution of the smaller plants in these centers may make possible the continuance of aircraft production despite the destruction of large final assembly plants of the order of OTA and KOIZUMI. The target value of these towns is enhanced by the fact that the volume of small parts and sub-assemblies flowing from them cannot easily be dispersed or duplicated, since much of the work is done by small shops contributing to larger parts plants.

熊谷市街の町工場を攻撃対象として重視していたことが書かれた米軍の「標的情報報告」=国立国会図書館提供[26]

おわりに

本稿では、日本で最初の疎開保育園と最後の熊谷空襲の歴史について、整理した。きっかけは、映画「あの日のオルガン」であった。埼玉と東京を舞台とした映画の足跡をたどってみることとした。実際に現地を調査して、現代とその時代を想像してみることができた。本映画は、実話に基づいて制作されていた。一般的に学童疎開は、知られているが、幼児の集団疎開の歴史については、あまり知られていない。しかも、疎開ということばや意味についても、今はもうあまりふれることがなくなった。しかし、今も昔も変わらない保育士と保育の仕事の意味を、改めて考える機会となった。

そして、疎開保育園の歴史をたどることで、熊谷空襲の歴史にふれることとなった。熊谷空襲については、以前から問題意識をもっていた。2020（令和２）年のコロナ禍、熊谷市内の書店で、熊谷空襲75周年記念出版プロジェクト編集委員会による『最後の空爆　熊谷』の本をみつけた。やっと、歴史の一部を知ることがでた。

この２つは、戦争末期の時代と重なり、筆者の問題意識ともつながっていたため、一緒に整理しておこうと考えた。

筆者の自宅から数分歩くと、すぐに田園風景となる。通称「坂下」からは、遠く、熊谷市街の高い建物が見える。毎年８月の夏には、熊谷花火大会が行われ、この場所からながめるのであるが。

前方には、和田吉野川が、その先には荒川が流れる。その向こう側の熊谷市街地へは、ここから約６キロ先である。

【注】

１）朝日新聞「映画あの日のオルガン公開」朝日新聞社、埼玉版、2019年2月24日付。
２）桶川市民ホール「あの日のオルガン」桶川市上映会、パンフレット、2019年。
３）五十嵐佳子著『小説　あの日のオルガン』朝日新聞出版、2019年。
４）久保つぎこ著『あの日のオルガン　疎開保育園物語』、朝日新聞社、2018年。
５）高木敏子・文　狩野ふきこ・絵『けんちゃんとトシせんせい』金の星社、2012年。
６）前掲３）。
７）浦辺史・宍戸健夫・村山祐一編著『保育の歴史』青木書店、1981年、105ページ～109ページ。
８）前掲７）。
９）汐見稔之・松本園子・高田文子・矢治有起・森川敬子編著『日本の保育の歴史　子ども観と保育の歴史150年』萌文書林、2017年、212ページ～213ページ。
10）前掲７）。
11）前掲４）、135ページ。
12）西脇二葉著「愛育隣保館による疎開保育園の実践」立教女学院短期大学紀要（第40巻）、2008年、45ページ～46ページ。
13）前掲12)、47ページ。
14）前掲12)、47ページ～50ページ。
15）前掲４）、104ページ。
16）韮塚一三郎著『埼玉県地名誌　── 名義の研究 ──』北信書出版、1977年、105ページ～108ページ。
17）映画「あの日のオルガン」蓮田市上映委員会「記念碑」説明文による。2020年。

18）前掲３)、253ページ～265ページ。
19）前掲３)、266ページ～277ページ。
20）小野文雄責編『図説　埼玉県の歴史』河出書房新社、1992年、256ページ～257ページ。
21）朝日新聞「標的、町工場を重視」朝日新聞社、2015年６月22日付。
22）朝日新聞「「熊谷空襲」伝承へ　高校生が取材」朝日新聞社、2020年12月30日付。
23）熊谷空襲を忘れない会編『最後の空襲　熊谷』社会評論社、2020年。33ページ～38ページ。
24）前掲23)、38ページ
25）前掲23)、38ページ～40ページ
26）前掲21）から抜粋。

【参考文献】

１）一条三子著『学童集団疎開　受け入れ地域から考える』岩波現代全書、2017年。
２）植山つる・浦辺史・岡田正章編著『戦後保育所の歴史』全国社会福祉協議会、1981年。
３）高橋康隆著『中島飛行機の研究』日本経済評論社、1999年。
４）埼玉県編発『埼玉県行政史』(第二巻)、埼玉県、1990年。
５）小泉和子編著『楽しき哀しき昭和の子ども史』河出書房新社、2018年。
６）埼玉県蓮田市『広報はすだ』(平成31年1月号)、蓮田市、2019年。
７）品川区立品川歴史館編『品川の学童集団疎開資料集』品川区教育委員会、1988年。